◆薬　局

薬局長　和田匡央

2018年度は、前年度退職者もあり、薬剤師1名欠員でスタート。その後、下半期に事務員1名欠員、年末に薬剤師1名産休・育休、年度末に薬剤師1名退職と、特に下半期は非常に厳しい体制での薬局運営となった。その中、当院ポリシーの一つでもある「協働」を推進し、企画総務室より、繁忙期の事務員支援を受けることができた。他部署との人材交流も含め、身体的負担は非常に大きかったが、得るものも大きかった1年であった。

[薬局理念]

患者さんを第一に考えた、安心・安全で良質な薬物療法の提供に努めます。

[基本方針]

・医療チームの一員として他職種と連携をはかり、医薬品の適正使用を推進します。
・向上心を持って自己研鑽に励み、より専門性の高い薬剤師を目指します。
・教育・研修を推進し、人として、医療人として暖かみのあるスタッフ育成に努めます。

2018年度の主な活動

1．人材育成

2018年度も、日常業務を遂行しながらの人材育成のため、チームワークで若手スタッフの育成に取り組んだ。ＯＪＴが中心の指導になるが、ベテラン薬剤師がいつでもサポートできる体制構築を行うとともに、経験から学べる環境作りに努めた。また、外部発表機会を設け、発表資料の作成・発表経験等から、考える力を磨くべく人材育成を行った。

2．外来対応

外来調剤は2018年度も薬局の中心業務であった。患者さんに、お薬手帳の重要性を十分認識頂き積極的利用を推進できた。また、薬局窓口での服薬指導内容を電子カルテに記録することで継続的な評価を行い、アドヒアランスの向上に努めた。その結果として、医薬品の適正使用に大いに貢献できていることを実感できた。患者さんのニーズに可能な限り応えるよう取り組み、特にジェネリック医薬品への切り替えを積極的に行った。また、一包化調剤や、残薬調整についても非常に手間のかかる業務ではあるが、断ること無く業務遂行し、服薬コンプライアンス向上、医療資源の有効活用、および患者さんの負担軽減に大いに貢献できたものと考える。

	2016年度	2017年度	2018年度
一包化調剤（外来）（件）	2,302	2,293	2,169

3．病棟業務

2018年度も「病棟薬剤業務実施加算」を継続取得するために、協働で質を保ちながら病棟業務活動を推進させることができた。引き続き、考える力、予測する力、コミュニケーション能力など、経験から学べる環境作りにも取り組んだ。また、ポリファーマシーの改善となる「薬剤総合調整加算」もわずかではあるが算定を行い、不要な薬剤の削減に努めた。土日休日の勤務も継続し、毎日薬剤師がいることで、医師、看護師へのサポートをはじめ、リスク管理や医薬品の適正使用にも大きく貢献できたものと考える。また、持ち込み薬（持参薬）が非常に多い中で、タイムリーな鑑別報告書作成を遂行した。時間が許す限り、各種回診等へも参加し、求められているチーム医療に貢献できたものと考える。

	2016年度	2017年度	2018年度
薬剤鑑別（件）	1,029	1,186	1,041

4．抗がん剤および高カロリー輸液の無菌調製

抗がん剤の無菌調製については、件数は前年度より減少しているが、1年を通して入院・外来を問わず、全ての抗がん剤の無菌調製を行うことができた。当日の急なオーダに対しても、臨機応変に対応し、特に医師の業務負担軽減（抗がん剤オーダサポート、前投与薬チェック、副作用予防薬処方支援など）に大いに貢献できたと考える。2018年度は、クリーン・ベンチを利用した高カロリー輸液の無菌調製が大幅に増加した。特に外来患者さんへの無菌調製も、診療報酬算定できない業務ではあるが継続的に行うことができた。

無菌調製（件）	2016年度	2017年度	2018年度
抗がん剤	144	175	144
高カロリー輸液	20	187	368

5．医薬品ミニレクチャーおよび自己啓発

2018年度も、薬剤師が病棟および外来に出向き、看護師向けに医薬品に関するミニレクチャーを実施（年3回実施）。また、2名の薬剤師が、各種研修会において計４回発表行った。また、毎週1回、業務開始前に医薬品に関する勉強会（メーカ主催及び各薬剤師担当の薬局内勉強会）を継続開催し、日々の研鑽とスキルアップに努めた。

6．医薬品在庫管理および情報提供

後発医薬品への切替えを推進し、年度末には「切り替え率74.9%」を達成。また、コスト管理等、経営面での貢献と、高額医薬品の適正管理や期限切れ医薬品の削減に努めた。医薬品情報データベースにはＤＩニュースをはじめ、看護師向け情報、安全性情報、疾患の基礎知識、研修会案内などを掲載し、情報の共有化・一元化に努めるとともに、いつでも、どこからでも確認できるよう改訂・更新を随時行った。

	2018年4月	2018年度末
後発医薬品切替え率（%）	54.8	74.9

今後の課題と展望

2019年度は、これまで経験したことない多忙な1年となりそうだが、「協働」「ひらめき・業務効率化」を常に意識し、いつでもサポートできる体制づくりを推進し、チームワークで「安心・安全で良質な薬物療法の提供」を継続していく。